

「一匹を見つけ出すまで」（ルカによる福音書一五章一〜一〇節）

1 徴税人、罪人と共に

今日からルカ一五章に入ります。ルカ一五章には、聖書の中で一番有名といってもよい、イエスの譬えによる教えがあります。

譬えは、三つあります。いま最初の二つをお読みしました。この二つはとてもよく似ています。今日説教で取り上げるのは、見失った羊の譬えです。無くした銀貨の譬えには直接触れません。これを中心に学び直すときが、いつかあると思います。その機会を待ちたいと思います。

早速、今日の譬え、見失った羊の譬えを、イエスが、だれに、どのような状況で語られたかを見ておきます。

徴税人や罪人が皆、話を聞こうとしてイエスに近寄って来た。するとファリサイ派の人々や律法学者たちは、「この人は罪人たちを迎えて、食事まで一緒にしている」と不平を言いだした。そこで、イエスは次のたとえを話された（一〜三節）。

だれに対して語られたかは明らかです。「ファリサイ派の人々や律法学者たち」に対してです。

また、どういう状況で語られたかもはっきりしています。イエスは、話を聞こうとイエスのところにやって来た徴税人や罪人らを迎え入れ、食事までも一緒にしていません。それを見てファリサイ派の人々や律法学者たちがぶつぶつ不平を言い出した、その中で語られたものです。

ただよく見ると、「この人は・・・」とあって、不満は、イエスその人に向けられていることに注意しなければなりません。

その上で、ここで起こっていることは何なのか、イエスの口からいま語り出されるのは、そのことの弁明（説明）ということになります。

ルカによる福音書を私も読んできて、これまで何度も、イエスが食卓について人々と一緒に食事をなさっている場面に出会ってきました。多くは招かれて食卓の人となつています。しかし自ら食卓をもうけている場面も、今日の箇所がそうですが、いくつかあります。

この食卓のイエス、当時の人たちにも、印象深いものだったように思います。だからというわけではありませんが、イエスは「大食漢で大酒飲みだ。徴税人や罪人の仲間だ」（七・三四）などと悪口も言われています。しかしそこにもし一片の真実があるとするれば、食卓の交わりをイエスは喜んでいて、大切にしていたという事実が写し出されていたようにも思います。

どうしてそうなのでしょうか。イエスの思いの中には、神の国での食事（一四・一五）ことが、いつもあつたからではないかと思えます。「人々は、東から西から、また南から北から来て、神の国で宴会の席に着く。そこでは、後の人が先になる者があ

り、先の人で後になる者もある」(一三・二九以下)。この終わりの日の、天における神の国の食事です。共に食卓を囲むイエスの姿は、そうした終わりの日の神の国の食卓と関連するものとしてあったのです。

そしてそこから見れば、当時、ユダヤの社会で、外国人と食事してはいけない、同じユダヤ人でも徴税人や罪人といわれる人とは一緒のテーブルに着いてはいけないという掟ほど、神の国と、神の豊かな交わりに反するものはないとイエスには見えていたのではないでしょう(使徒一〇・二八他)。反対にフアリサイ派の人々、律法学者たちからすれば、食卓に関する規範や律法は、イエスによってことごとく無視されたということになるのです。

イエスは掟に従わない、そしてああした連中と付き合い、受け入れ、あまつさえ食事を共にしている、そんなことで神のことが説けるのか、それがイエスに向けられた非難であったのです。

「徴税人」というのは、ご承知のように、支配民族ローマのためユダヤ人から税金を徴収する仕事をしてきたユダヤ人です。バプテスマのヨハネが洗礼を志願してきた徴税人に「規定以上のものは取り立てるな」(三・一三)といっていますが、そうした悪に染まりやすいところにいた人です。新約聖書では、このような徴税人や娼婦などが、典型的な「罪人」とされてきました。つまり、神の掟に反する生活をしている者たちです。その他にも、不正や不義に関わりやすい職業の者たち、それゆえ法廷で証言する権利なども奪われていた人たちを指します。差別を受け、さげすまれ、社会の周縁に置かれた人たちです。その人たちと親しく同じ食卓を囲むイエス、これをもどのように見るべきでしょうか。

2 イエスの譬え

ここで起こっていることを、イエスは、一つの譬えをもって説明しています。四〇六節が譬えです。七節はイエスご自身の解説、結論です。

あなたがたの中に、百匹の羊を持っている人がいて、その一匹を見失ったとすれば、九十九匹を野原に残して、見失った一匹を見つけ出すまで捜し回らないだろうか。そして、見つけたら、喜んでその羊を担いで、家に帰り、友達や近所の人々を呼び集めて、「見失った羊を見つけたので、一緒に喜んでください」と言うであろう(四〇六節)。

これは聖書(ルカ)がいうように、「たとえ」です。譬えは、一般に現実の出来事や生活からとられます。みんながよく知っているものです。そしてそこに神の真理を暗示するものがある、と。

この譬えの中心は「百匹の羊を持っている人」、ここには「羊飼」という言葉は使われていないのですが、簡単にいえば羊飼いです。そしてこの人がイエス・キリストを暗示している、つまり、自分はここで描かれたような羊飼いだ、イエスは語っているのです。

少し面白いのは、あるいは注意したいのは、「あなたがたの中に」という言葉から始まっていることです。「あなたがた」とは、もちろん、聞いている、聞かされているファリサイ派の人々と律法学者たちです。イエスは、彼らもよく知っている羊飼いの姿を思い起こすようにと訴えています。

問題になっているのは、群れの中から羊がいなくなった場合のことです。しかもこの場合たった一匹です。

一方の極端な考えは、一匹ぐらいなら、そのままにしておいていい、とする考え方です。しかし、ユダヤの羊飼いたちは、そうは考えませんでした。たとえ一匹でも捜さなければならぬ。それが羊飼いの務めです。ファリサイ派の人々も律法学者たちも共通の考えです。

例えば、日に何回か、頭数を数えることがなされていたようです。百匹というのは一人の牧童にとつて多い数です。もう少し少なかった。羊にも特徴があり、多くは名前（愛称）すらあった。一匹いないことはすぐ分かっただろうと思います。獣にでも食われてしまったなら、獣の口からその残りでも引き出して、獣に殺された証拠としなければならなかったのです。羊飼いは、そこまでして、群れの一匹一匹を心にかけていたのです。

イエスの譬えの羊飼いは、ファリサイ派も律法学者も知っている、一般の羊飼いと違うところがあります。ふつう羊飼いは、仲間の羊飼いがいる場合には、それに残りの羊をあずけて捜しに行く、あるいはそういう人がいないときには——ここはそういうケース——洞窟などにちゃんと避難させてから探しに行くというようであったようだからです。イエスの羊飼いは、「九十九匹を野原に残して」捜し回ります。「野原」と訳されているのは「荒れ野」（協会共同訳）です。九十九匹を危険にさらすということですが、いなくなった一匹は、この羊飼いとつて九十九匹にも等しい重さをもっているのです。これも、他方の極端です。

見つけたときのことは、この一匹の羊が羊飼いとつて、どんなに大切であったかを物語っています。「見つけたら、喜んでその羊を担いで、家に帰り、友達や近所の人々を呼び集めて、『見失った羊を見つけたので、一緒に喜んでください』と云うであろう」。仲間の羊飼いや、この見失われた羊のことを、どんなに心配して、待っていたでしょう。羊飼いはやがていなくなった羊を肩に乗せて帰ってきます。村中は喜びでいっぱいです。

しかし何よりも、喜びに満たされたのは、その羊飼いです。家に帰った彼は祝宴を開き、友人や隣人を呼び集めて、その一匹の見つけたことを喜んでくれるように言うのです。まさに大宴会です。そしてこの喜びに、あなたがた、ファリサイ派の人たちと律法学者たちも加わるべきなのです。イエスの譬えは、彼らに対する招きでもありました。

3 赦された罪人の集まり

さてイエスの話は、あなたがた自身が羊飼いの立場に立って考えてほしいというファリサイ派や律法学者に要求するところから始まっています。羊飼いはどういう

存在か彼らも知っていました。イエスの示した羊飼いは、その彼らのイメージと大きく違ったものではありません。しかしそれは、羊飼いとは何か、その本当の姿をはつきり示すものでもあったのです。イエスが描き出した羊飼いがイエスご自身であることは、彼らにも、すでに明らかです。

徴税人も罪人も、群れからはぐれた羊のような存在です。しかし彼らもともと群れの一員です。迷い出た羊をもとに連れ戻す、見つけ出すまで捜しもとめる、それがわたしの務めだとイエスは明らかにしています。

旧約聖書以来、羊、そして羊飼い、様々な場面で登場します。それだけイスラエルの生活に密着したことでした。エゼキエル三四章もその代表的な箇所の一つです。そこには自分自身を養って、民を養わない、悪しき羊飼いのことが語られています。彼らは病める者をいやさず、傷ついた者を包んでやらない。ファリサイ派の人々、律法学者たちも、宗教、社会のエリートとして、そのようなイスラエルの牧者の働きを期待されていた人たちです。しかしいま真の羊飼いとして働いているのは、イエスであつたのです。

さてイエスは、結びの言葉で、見つけ出され、家に戻ってきた羊を「悔い改める一人の罪人」になぞらえています。ここから私どもも、少し視点を変えて、今日の箇所から教会のことを考えることができるように思います。またそのように促されているのです。

言っておくが、このように、悔い改める一人の罪人については、悔い改める必要のない九十九人の正しい人についてよりも大きな喜びがある（七節）。

「悔い改める」とは方向を転換することです。その人の目指す目的地が違ってくるのです。神へと自らの人生を向けることです。しかしそれを自分の力で成し遂げることとはできません。羊飼いが、迷い出た小羊を捜し求め、見つけた小羊を背負って、家に帰って来たことを今日は聖書から聞きました。この善き羊飼いイエスの働きがあつてはじめて、私どもも神へと立ち返ることができるのです。

この私どもの立ち返り、それは、むしろ私どもの喜びですが、それだけではありません。じつに、この地上でと同じく、それ以上に、大きな喜びが天上にあると言われています。

そのように悔い改め、立ち返った者の群れ、それが教会です。教会は、赦された罪人たちの集まりです。そして羊飼いであるイエスの言葉に聞き従い、伝えるために集められた群れです。御言葉と共に聖霊をたまわっている群れです。

今日のイエスの譬え、神にとって一人ひとりがどんなに大切な存在かということに改めて私どもに思い起こさせます。神は御子イエスにおいて一人を救い出すために行動したまいました。「神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された。独り子を信じる者が一人も滅びないで永遠の命を得るためである」（ヨハネ三・一六）。神にとって、私ども一人ひとりが、そのあるがままの姿において、大切な、見失われなくてはならない存在なのです。

（二〇二二年四月二四日）